
純桜学園探偵部の事件簿 ～桜の数え歌～

高幡茜

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

純桜学園探偵部の事件簿 ～桜の数え歌～

【Nコード】

N2793D

【作者名】

高幡茜

【あらすじ】

主人公の福島瞳は、部活を探していた。すると、幼馴染みの、桜井陸に会う。陸は自分が、入ってる部活『探偵部』を紹介してくれ、瞳は探偵部に入ることにした。瞳が探偵部に入って、一週間が過ぎた頃、探偵部に一通の手紙が届く。手紙の内容は、『純桜大学にあるサークルが、不気味な歌があると言われている、島に行く事になっているので、それに付いて来て欲しい』と言うものだった。

桜の数え歌

桜の花がありました
花びら五枚
数えましょう

一枚
空に飛んで行き

二枚
風に吹かれ
消えていき

三枚
家の上に行き

四枚
土に埋められて

五枚
本のしおりに

これが桜の数え歌

部活探し

季節は、春。

この季節は、私達の町に沢山の観光客が来る。観光客の目的は、桜。私達の町に沢山桜がある。あちらこちらで咲く桜は、町全体が観光スポットになる。もちろん、学校もね。

私の学校・・・純桜学園じゅんおうがくえんは、市内でも一番桜がある場所。連休がある日は、学校までもが、観光スポットになる。

春だけじゃなく、四季を通して、綺麗な景色を見せてくれるこの町は、私の自慢！

そして、私の学校・・・純桜学園の校庭の桜は、見頃を迎えていた。校庭に春風が走り、花びら達は春風に誘われ、校庭で舞っている。

入学式から二週間が経った。一年生は、自分が入る部活を探している。

そろそろ自己紹介しないとね。始めまして、私はここ・・・純桜学園の生徒の福島瞳、二年。私は今、部活を探している。って、いきなり言われてもわかんないか。じゃあ、順を踏んで言っよ。

まず、私の学校では一年に一度、去年やっていた部活を、続けるかどうかの紙が渡される。続ける人は、『続ける』と記すしる。続けな^い人は『続けない』と記す。続け^{ない}人は、一年生と同じ期間だけ、部活を、見学する事ができる。そして、一年生と同じ期間中に、次にやる部活の名前を書いて紙を先生に出す。

ここまでで、分かった？つまり、私は、今言ったことがあったから、部活を探している。そして、次にやる部活の名前を書いて先生に出さなくていけないのは、今週の金曜日。残り後・四日。

「はあ〜」

部活を決めるのに、こんなに時間がかかるのは何故かって思った人もいるよね？理由は一つ。私の学校は無限大に、部活があるから。

私の学校はきちんと決まっている部活もあれば、自分達でがつくったサークルや、同好会などなどいろんな部活がある。（多分、100は軽く超えてると思う・・・）

それで、ここからが大変。そんな、無限大にある部活を一つ一つ探さなくちゃいけないんだから・・・。で、私が考えたのは、掲示板。掲示板には、この時期一人でも多くの部員を増やそうと、いろんな部活の張り紙を貼る。それを見れば簡単に、部活を探せるって考えたんだけど・・・。自分の想像を遥かに超えた事が起きたの。部活紹介の掲示板ギリギリまで紙が張ってある。しかも、紙と紙同士が重なっていて、何がなんだか分らない状態になっている。

「実際に見た方がいいかな？」

私は、体育館へ足を向けた。体育館では柔道部や、バスケットボール部、バレー部など、体育系の部活が集まっている。そんな体育館へ行く途中、私は図書室の前を通った。図書室の前の廊下は静かで、図書室の中からは、『カリカリカリ』と鉛筆を走らせる音だけが響いて聞こえてくる。

図書室では、文芸部が本を読んだり、小説を書いたりしている。（文芸部も悪くはないかな？）

そんな風に思っていると、後ろから誰かが歩いてくる音がする。後ろを見ると、私の幼馴染み桜井陸君さくらいりくがいた。

「あれ？福島さん。どうしたの？」

桜井陸君は、さっきも言ったように私の幼馴染み。小学生の時からずっと同じ学校。同じクラスになったのは数回しかない。桜井君は、3年の先輩や、近所のオバサン、他校の生徒からも人気で、朝靴箱を開けると雪崩のようにラブレターが落ちてくるほど。幼馴染みだからと言って恋愛感情は起きない。桜井君は誰にでも優しく接してる。それも、人気の一つみただけで、私はあまり気にしていない。話を戻そう。

桜井君は、分厚い本ぶんあつを何冊も抱えている。（何に使うんだろう？）聞いてみると部活で使うそうだ。

「部活で？」

「うん」

「そう言えば、桜井君って、何部に入ってるんだっけ？」

桜井君の噂だったら一週間もしないうちに広まる。そのため、聞こえしなくても、自然と噂は自分の耳に入ってくる。だけど、部活は違う。桜井君が何活に入ってるのか一度も聞いた事がなかった。噂にするつもりはないけど、一度は聞いてみたい。

「えっと・・・福島さん聞いたら引くと思っよ・・・？」

「そう？」

「多分・・・」

「大丈夫だよ！今、掲示板見て来たけどさ、思っていた以上に変な部活、沢山あったしさ」

桜井君は少し、『ん〜』と考える様子を見せてから、部活を案内してくれると言った。

「ほんと!？」

「うん。あつ、そう言えば、福島さんって、部活やってる？」

「うんうん。今は部活を探してるとこ」

「そうか。じゃあ、好都合かな？」

「何が？」

「いや。こつちの話」

そう言うと桜井君は、一人で歩き始めた。今にも鼻歌を歌いだしそうなほど嬉しそうな顔をして。私は、桜井君の後に付いていった。「で、桜井君。桜井君がやってる部活の名前って何？」

「着いてからのお楽しみ」

ギシッ ギシッ ミシッ ミシッ

桜井君と私が今いる所は、私達が普段使っている新校舎ではなく、体育館の隣にある旧校舎。夏休みの、学園で行われる肝だめしの時くらいしか近づかない旧校舎に、私は今いる。

「部室・・・まだ？」

部活があると言う場所に、なかなか着かない。

「んー。この階段上がってもう少しかな？」

桜井君の言葉は、相変わらず嬉しそうだった。階段は、ギシギシいつてる。いつ床が抜けるか分らない。

階段を上りきると、桜井君は左へ曲がった。私はそれに付いて行く。幾つかの教室はあるが、名前のところがボケたりしていて、はっきりした名前が分らない。すると、少し先に行っていた桜井君が、あるドアの前で待っていた。私は、桜井君に追いつきドアを見るとドアには『会議室』と書いてある。

「会議室？」

「うん。ここが、俺が入ってる部活の部室」

そう言いながら桜井君はドアを開けた。

「おつそーい！」

「はい!??」

桜井君の顔が引きつった。中から、誰かが人差し指を桜井君に向けて何かを言ってる。声からして、女の子だと思う。

「全く陸君は！毎回遅いんだから！」

その声はどつかで聞いたことある気がするけど・・・何処だったかな？

「悪い悪い。ちょっと立ち話してて」

「悪いと思っただったら早く来なさい！」

口調はまるで母親だ。桜井君は慣れているのか苦笑いしている。

「たく〜。今度からしないでね！」

「はいはい。でも、今回は意味のある立ち話だったよ」

そう言うと、桜井君は私の方を見た。

「俺ともう一人いるんだ。この子、部員になるかもよ？」

すると、中から、さっきまで桜井君と話していた人が出てきた。

「あ〜!」

私と、女の子は声が重なった。

「秋！」

「瞳！どうした？」

「へ？秋と福島さん知り合い？」

「知り合いつて言うよりも、親友」

私と秋は声を合わせて、『ねえ』と言った。

ふじわらあきな

藤原秋奈。通称秋。私の親友で、クラスのムードメーカー。秋が

いるだけで、クラスは物凄く盛り上がる。秋と知り合ったのは中学の時から。最初、秋から声を掛けてきてくれて、それから仲良しになった。高校に入ってから部活はそれぞれだったから、最近話していなかった。何の部活に入ったか分らなかったけど、桜井君と同じ部に入ってたんだ……。

「二人とも中に入ったら？」

桜井君の言葉で私達は我に返った。中に入ると、見渡す限り本だらけ。私は、呆然として立ち尽くしていた。本好きの私には溜まらない空間だ。そうしていると、秋に話し掛けられた。

「瞳、この部に入ってくれる？ここ、物凄く楽しんだ！」

「そ、そうなんだ……」

「部活まだ決めてないんだよね？」

「ん？うん……」

「だったら尚更！ここに入ってくんない？ここさ、部員がさ少なくて……瞳が入ってくると助かるんだよね」

秋はそう言いながら、ドアの近くにあったパイプ椅子を、私の前に置いた。

「瞳、どうぞ」

秋は、満足そうな笑みを見せてた。

「有り難う。ね、ここの部員つて、何人くらい居るの？」

「んとね。部長と副部長、部員二人。だから……四人かな」

「そんなに少ないの!？」

「だから、瞳に入つて欲しいんだよ」

秋は、すが絶るような表情で言ってきた。

「そ、そうなんだ・・・そう言えばさ・・・ここって何部だった？」

「部活名聞かないで来たの？」

「うん・・・」

「まあ、いいや。ちなみに、ここは、探偵部だよ」

探偵部（前書き）

誤字、脱字がありましたら、教えてください。

探偵部

探偵部……。以外だ。秋と桜井君が、こんな部に入ってるなんて。そもそも、この学校は変てこな部活が沢山あることで、有名だったけど……。まさか探偵部なんて部があるなんて……。バタン！

「疲れた〜！」

「シャキッとしなさい！」

「だって〜」

中に入って来たのは、眼鏡をかけた男女だった。男子の方は近くにあった、椅子に寄り掛かった。女子の方は『まったく』と言っている。すると、私の前に座っていた秋は、立ち上がって眼鏡をかけた男女の方に行った。

「おかえり〜」

「ただいま」

「ただいま〜」

「少し遅かったんじゃない？」

なんか、四人で話し始めちゃったけど……。眼鏡をかけた二人どっかで……。

「あ！そうそう。真子！裕太！部員になるかもしれない人がいるんだ！」

秋はそう言うと、今度は私の方に来た。

「あくまでも、なるかもだからな」

「そうだよ。見学しに来ただけだから……」

「そうなの……？」

秋の物凄く残念そうな声。オタクが思わず言う『萌え〜』って、こんなものなんだろうね。

「あっそうだ。私、部活探してる最中だから、部活について詳しく話してくれないかな？」

すると、秋の表情がパツと明るくなった。

「だって！部長、部活の話聞きたいだって！部長の出番だよ！」

部長と呼ばれた眼鏡の男子は、寄り掛かっていた椅子から嫌々立ち上がった。そして、私の方へ歩いて、さっきまで、秋が座っていた椅子に座った。

「じゃ。部長お願いします」

秋の楽しそうな声。眼鏡の男子の瞳は何を考えているの分らない。何か、自分の本心を見ぬかれているような感じがする。（何を言われるんだろう？）ドキドキしながら待つてみるが、何も話さない。

「何話すの？」

なんて間抜けな質問。

「話し聞いてなかったの？」

「うん」

眼鏡の女子は飽きた言うような顔をして何を話すのか説明した。

「・・・これで分った？」

「分った。部活の内容とか話せば良いんでしょ？」

眼鏡の男子以外の全員で頷いた。

「じゃあ。何から話そう。・・・この名前聞いた？」

私は頷いた。

「それじゃあ、今いる部員を紹介しようか。僕は部長の高橋裕太。

で、こちらが、副部長の高山真子。たかやままこ部員の藤原秋奈と桜井陸」

紹介された順に挨拶をした。

「じゃあ、次は活動内容か・・・これは、真子に任せるよ」

「ホント、面倒くさがりね」

副部長の高山と紹介された女子がそう言ってる間に、部長の高橋君は、近くにあった本を読み始めた。

「全く・・・えっと、始めまして。瞳さんって、何組だったかしら？」

「2年C組です・・・って、私、自己紹介してませんが」

「そうね。でもここは、探偵部ですよ？」

「一応、ここにいる皆は【探偵】としているからね。自己紹介しなくても、名前くらいすぐ把握出来るよ。って言っても、名札見れば分かるけどね」

桜井君は本を棚に上げる作業をしながら言った。（そっか・・・）
「じゃあ、そろそろ活動内容を話しましょう。ここ、探偵部の活動内容の基本は、掲示板に張られる依頼を解決する事。依頼を受けた時、情報に困らないように、新校舎から本を持ってきて、情報収集する。これが基本」

「まあ。これが基本で言っても、依頼を受けた事がないけどね」
本を読みながら高橋君が言った。すると、皆、話さなくなってしまう（え・・・）

「それ・・・本当？」

しばらくの沈黙。（絶対いけないこと言ったよね）しばらくして、
「ま、まあ。しょうがないよね？福島さん、もう少し探偵部について聞く？」

「う、うん」

その後、五分ほど話を聞いた。しかし、その話は、部活に直接関係のあるものじゃなかった。唯一、部の決まりは

『部員同士は、必ず下の名前で呼ぶべし』だそうだ。

「この決まり、誰が決めたの？」

「私だよ。だってさ、部員なお互い、改まって苗字で呼ぶの、なんか・・・嫌だったんだ。だから、この決まり作ったんだよ」
なんか、秋らしいな。

「どうだった？秋が、こう言った時」

「始めは聞いた時ビックリしたね。今ではもう慣れたけどね」

桜井君は、苦笑いした表情で答えてくれた。

「そうなんだ」

こんな風に話を聞いてると、楽しそうだなあ。

「ねえ、そろそろ本を棚に上げない？時間も少ししかないし」

「そうだね。福島さんどうする？」

「ん〜、今何時だっけ？」

「四時をちよつと過ぎたくらいよ」

「だったら手伝うよ」

「そう？じゃ、その本、こっちに持ってきてくれる？」

「はい！」

一時間半後

「はい、お疲れ様でした〜この続きは明日の放課後ね〜」

高橋君が言ったが、その後十分ほど、皆は動けなかった。

入学式から二週間しか経ってないのに部活は、本格的になる。その為、帰りが七時過ぎの部活があるそうだけど、私は五時半に学校を出た。家に着いたのは、六時ちよつと過ぎた頃だった。家に着くと、自分の部屋に行き、バックを机に置いて、ベットに寝そべった。「何部に入ろうかな・・・」

そんな事を思っていると、今日の疲れが出たのか、私はそのまま寝てしまった。

探偵部（後書き）

感想も、評価もお待ちしています。

二人の名前

『ジリリリリリリ〜』

耳障りな音がするな〜。

『ジリリリリリリ〜』

いくら振り払っても付きまとう。

「あ〜も！五月蠅おんこいな〜！」

そう言いながら私は、起きた。気付くと、私の隣に誰かがいた。

「五月蠅いな！じゃないわよ！時間を見なさい！」

目の前に出されたのは、私の目覚し時計。寝ぼけた頭でその時間を理解する。そしてやっと気付く。

「あ〜〜〜〜〜〜〜〜！」

「やっと分った？」

「塾！」

「分ったら寝癖を直してすぐに行く！」

「はい〜！」

私は、一階の鏡を見て寝癖を直してお母さんが、用意してくれたバックを持って急いで出かけた。

「行って来ま〜す」

「行ってらっしゃ〜い」

ここを使って、お母さんの紹介をするね。私のお母さんの名前は、ふくしまやよこ福島弥生。

私のお母さんは、皆から言われるんだけど、とっても若々しいんだ。お父さんとカフェを経営してるんだよ。ついでに、お父さんも紹介するね。お父さんの名前は、ふくしませいや福島誠也って言うの。お父さんは力持ちだけど、体は細身なんだよね。『何処にあんな力があるのかな？』ってお母さんがいつも言ってる。

あつ。そろそろ、塾に着くや。のんびりしてる暇ない。急がないと！

六時五十分 天來塾てんらいじゅく (間に合った)

「こんばんわ」

中は少しざわついてる。(もうすでに、自習勉強してる人がいるよ。どんだけ、真面目なのよ)

私は、いつもの席についた。自分の席が決まってる訳じゃないけど、席って自然と決まってくもの。しばらくすると、講師の先生が来た。名前は、朝倉紗樹あさくらさき。二十歳後半の先生だけど、高校の制服着せると、普通の生徒にしか見えなくなる。前、新しく先生が来たと紹介された時、普通の生徒かな？って思ったほど。

「はいはい。静かに〜！」

先生が言くと皆は静かになった。

「はい、今日は・・・」

先生は、今日やる所について話してる。私はペン回しをしながら先生の話を聞く。別に簡単すぎてこんな風に聞いている訳じゃない。いつもだったら、先生をジューツと、穴が空くんじゃないかってくらい先生を見て聞いている。でも今日は、探偵部の部長の名前と副部長の名前が頭の中でグルグル回っている。

「どっかで聞いた事あるんだけど」

ずっとそれを考えてると、前の方から先生がやって来た。やってないのを見つからない様に慌てて、隠しながらやってるふりをする。先生は素通りしてつた。(良かった)そしてまた、部長と副部長の名前を何処で聞いたか思い出そうと、ペン回しをしながら考える。

「あれ？福島さん？進んでないじゃない」

(あれ！さっき来たばっかだよ。いつの間に！)

「分らないのかな？」

「い・・・いや。分りますけど・・・」

「じゃあ、やるうね」

満面の笑みを浮かべ、朝倉先生は立ち去った。(いつの間に・・・)
朝倉先生は、影が薄いから度々こういう事あるって聞いたけど、

本当にあると怖いな。（家に帰ってからいつか）そう思い、私は鉛筆を走らせた。

八時五十五分（塾が終わる頃）

「じゃあ、このプリントを終われた人から帰って良いよ」

そう言つと、先生はプリントを渡し始めた。プリントの内容は、今日のまとめだった。私はそれを、ちゃちゃっと終わらせて、家へと帰った。

「ただいま」

「おかえり。瞳、塾間に合った？」

「何とかね」

すると、美味しそうな匂いがいてきた。

「今日はハンバーグでしょ！」

「当たり前。早く手を洗ってきなさい」

「はい」

私は洗面所の方に行った。

「お腹すいた〜あ、お父さん。もしかして、今まで寝てた？」

「何でわかつファ〜」

「寝癖、ついてる」

「お父さん、少し髪とかして来て下さい」

「はいはい」

お父さんは洗面所の方に行った。私とお母さんは、その間にテーブルにご飯や、味噌汁、今日のおかずのハンバーグを並べた。しばらくすると、お父さんが戻ってきて、家族そろって『いただきます』を言った。

食事が終わって、私の部屋。

私は、机に向かって勉強をしようとしてるとこ。だけど、いざ、やるうと思っても、宿題に集中出来ない。しょうがなく私は、ベッドに寝そべり、目をつぶって、塾で考えていた事を思い出す。

（何時だったかな？高橋裕太と高山真子の名前、聞いたの。もう少し……もう少しい出せるのに……）

そして、私は思い出した。

「思い出した！」

思わず大きな声を出してしまった。

「一年の時、聞いたんだった」

記憶

一年生の定期テスト。高校生になってから初めての定期テスト（中間テスト）が行われたのは、もうすぐ夏休みって時だった。

「今回の定期テストを返すぞ」

担任だった、蝦原悠治先生^{えびはらゆうじ}。普段はとても優しい先生だけど、怒り出すと誰にも止められないくらい怖い先生だった。その先生から、出席番号順にテストが返される。

そして、とうとう私の番。一応、勉強はしたけど自信は無い。

「瞳、後一步。惜しかったな」

残念そうな顔をして、先生は私の解答用紙を渡した。点数を見ると、ホントに惜しかった。返されたテスト用紙全て、後一步で九十点が取れる点数だったのだから。

「席に付け。今回、高校に入ってからからのテストはどうだった？惜しい奴もいただろう。そういう奴じゃなくても、夏休みに、予習・復習をシツカリやるように！」

蛭原先生の言葉に皆、『はい』と言った。すると、授業が終わるのを知らせるチャイムが鳴った。

「授業はこれまで！」

「起立！礼！」

『有り難うございました！』

授業が終わると、皆はさっき返されたテストと睨めっこしたり、男子では泣く真似をして、今回のテストの結果に悲しんだりしている人が見受けられた。そんな皆を見渡していると、ある女の子が近づいてきた。

髪が肩くらいで、その髪の毛の先が外に軽くはねている。とてもカワイイ子。名前は、井藤千尋^{いとうちひろ}。千尋は、私の友達。高校になって初めて言葉を交わした子。男子からとても人気があるが、本人は気にしていない様子。千尋は、今回のテストについて聞いてきた。

「後一步で、九十点だったんだけどね」

「惜しかったじゃん！私も似たような感じだったよ」

「お互い惜しかったね」

「ホント」。あ、そうそう一年A組に、優等生がいるらしいよ！名前は確かく高山真子とか言っていたかな？」

「へ」

「なんでも。今回のテスト、全部九十点越えしてるらしいよ」

「本当!？」

私の言葉に、千尋は頷いた。

「見に行っちゃおうか？」

「行く行く!」

私と千尋はA組に向かった。A組の前には沢山の人がいた。噂をかぎ付けて来たらしい。

「どうする？」

私が聞くと、見に行きたい気持ちをグツと堪え、千尋は昼に行こうと言った。

- 昼休み -

昼休み行くと、人の数は減っていた。教室の後ろのドアから中の様子を見ると、窓ガラスの近くに、眼鏡をかけ本を読んでいる女子生徒がいた。

「あの子かな？」

私が聞くと、『そうかもね』と千尋が短く答えた。すると、私の親友の秋がその女子に話し掛けた。それを見ていた私は、秋を呼んだ。

秋は、濟まなそうな顔をして女子から離れ、私達の方に来た。

「ね、秋。あの子の名前って、高山真子でいいんだよね？」

「そうだけ」

「あの人って、どんな人？」

「ん、優しく、とっても頼りがいがある人だよ」

「高山さん、今回のテスト、全部九十点超えしてるって、ホント？」
秋は、思い出すようにして考え、その後『そうだよ』と言った。
私と千尋は『あの噂、本当だったんだ』と、声を合わせて言った。
「あ、そう言えば。このクラスって、九十点越えの人がもう一人いるって聞いたけど誰だった？」

「もしかして、あの男子かな？」

秋は人差し指を、ある男子に向けて言った。私と千尋はその指先を見ると、眼鏡をかけた男子がいた。

「そうそう！あの男子。名前は確か」

「高橋裕太。高橋君は、推理小説しか読まないんだよ」

「変な男子だね」

「でも、高橋君凄いなだよ。皆から『オタク』みたいな目で見られてたんだけど、からかった男子を吹っ飛ばしたんだ！結構、運動神経良いみたいだよ！」

秋は興奮した様子で言った。すると、お昼休みが終わる、チャイムが鳴った。

「じゃあね、秋。色々教えてくれて！」

「じゃあね！」

あの二人か・・・

記憶（後書き）

変な文章になっていたりしたら、お知らせください。

部活は決まったが・・・

あの二人か・・・高橋君の名前と、高山さんの名前を聞いた時、何処かで聞いた事あるなあ〜って思ったら、一年の定期テストの時、噂で聞いたんだった。

「でも、高山さんの名前、最近聞かないなあ」

しばらく私は、一人で色々考えていた。そして、ふと時計を見ると十時を過ぎていた。

「ヤバイ！ヤバイ！」

私は急いで宿題をやり始めた。

翌日・部活を決めなくてはいけない日まで、残り・三日。

「行って来ます」

「行ってらっしゃい」

私はいつものように家を出た。でも、私はいつものように、学校へは向かっていなかった。朝からテンションが上がっている人は、そうそう居ないと思うけど、私は必ずと言って良いほど、曲がる所にさしかかると、溜息をついた。その理由は一つ。部活をまだ決められずにいるから。（残り三日しかないのに・・・）

「はあ〜」

「なーに溜息なんかついてんの」

振り向くと、そこには千尋がいた。

「久し振り、千尋」

「久し振り」

相変わらず男子からの人気は、劣らないな。近くを通った男子は、頬を赤く染めて付いて来てるよ。

「どうしたの？」

「え？いや、何でもないよ」

「あんな大きい溜息ついてて、何でもないようには思えないけど？」

「たいした事じゃないんだって、ホント・・・」
「そうなの？」

「うん。あっ、そう言えばさ、千尋って何部に入ってるんだっけ？」
「えっとね、美術部」

「そうか、千尋は絵が上手いからね」
「そうでもないけどさ」

（千尋は美術部か・・・）そんな風に二人で話していると、学校に着いた。私と千尋はそれぞれ自分のクラスに行った。私は、自分の席につくと、また溜息をついた。

「ひくとくみ！」

ポンと私の肩を叩くと、『どうしたの？』と秋が聞いてきた。
私は、その質問には答えなかった。

「はあ」

「ほんとに、どうしたの？」

「部活・・・決められなくてさ・・・」

「あと、何日だっけ？」

「・・・三日」

「だったら、うちに入ったら良いよ！」

「いや、それも考えたんだけどね。『推理力』ってものが私にはないからさ。無理かな？って思ってたさ」

「それだったら、心配ないよ。楽しくやれば良いんだもん！」

秋らしいや・・・

その日一日、部活の事しか頭になかった。

（今日も行くのかな？）窓の外にある、旧校舎をボーツと眺めながら思っていた。

「瞳、部活のアレ、出したか？」

声のする方を見ると、今の担任の栗原桂吾くりはらけいご先生がいた。校内の【女子が選ぶカッコイイ先生ランキング】一位の先生。アイドル並みの人気がある。

「アレって、なんですか？」

「アレって、部活の紙だよ」

「ああ、アレですか。今週末には出しますよ」

「そうか、早く決めろよ」

「はい」

早くだからな、と最後に付け足して立ち去った。（家に帰ってからじっくり考えるか・・・）

・ 帰り道 ・

「はあ〜」

登校の時のように、角で曲がり度、溜息をついた。

「どうしようなあ〜部活・・・」

私はそう言いながら、空を見上げた。雲はゆっくり、ゆっくり流れていた。烏も『カーカー』言いながら飛んでいる。

「楽しくやれば良いんだもん！か・・・」

秋らしいなと再び思う。推理小説とかは好きで、読んだりしてるけど、ん〜。探偵部でも良いかな？他にも、面白そうな部活なさそうだしな・・・どうしよう・・・

「はあ〜」

しばらく、どうしようかと悩んでいると家に着いた。

「ただいま〜」

返事なし。今日は仕事の日か・・・私はすぐに自分の部屋へ行った。

「今日は塾もないし」

そう言いながら、バフツとベッドにうつ伏せの状態で倒れた。

「どうしようかなあ・・・お母さんは自分の好きな部活やったら？」

って言うし、お父さんも同じ事言うし・・・探偵部、入りたいな・・・

私はバックの中にしまっておいた紙を取り出した。（今日中に決めよう！）そして再び、ベッドに寝転んだ。しばらくしてからガバ

ツと起きて、紙に部活名を書いた。
「残りの今年と来年、楽しい方が良さね！」

- 翌日 - 部活を決めなくてはいけない日まで、残り・二日
私は、学校に着くと、自分の席にバツクを置いて職員室に向かった。そして、職員室の中で栗原先生を探すと、先生は自分の机の所にいた。

「先生、昨日言ってた部活の紙、持って来ました」

「そうか、・・・ん？探偵部？お前、探偵部に入るのか？」

「はい、そうですが・・・」

「そうか、そうか。お前、入ってくれるのか」

「嬉しそうですね。ちなみに、探偵部の顧問の先生っていますか？」

「当然じゃないか」

「じゃあ、顧問の先生って誰ですか？」

「探偵部の人に聞いてみると良いよ」

「そうですか・・・」

探偵部の人・・・。秋ぐらいか、あの部に入ってる、親しい人と言えば。教室に戻ると、秋は読書をしていた。邪魔はしたくなかった。放課後、聞く事にした。

- 放課後 -

「秋、聞きたい事あるんだけど」

「何？」

部活に行こうとしていた秋を、私は止めた。

「秋達が入ってる部の、顧問の先生って誰？」

「んゝ瞳が部に入ってくれるなら良いよ？」

「部活の紙、今日出したよ。探偵部って書いてね」

「ホント！やったー！瞳が入ってくれる！」

秋は、ピョンピョン跳ねて喜んだ。

「嬉しいのは分るけど、顧問の先生は誰？」

「部に来てからのお楽しみ！じゃ、部活、先行ってるね！」

「う、うん」

秋は嬉しそうに駆けて行った。それにしても、顧問の先生は誰なんだろう？

あなたは、分りますか？

部活は決まったが・・・（後書き）

誤字・脱字がありましたら、お知らせください。
感想や評価の方も待っています

顧問の先生は・・・

「顧問の先生って、誰なんだろう？ん〜・・・」
私は、教室でしばらく考えていた。すると、栗原先生が入って来た。
た。

「あ、先生・・・」

「まだ、部活に行つてなかったのか」

「顧問の先生が、誰なのかな〜？って考えていたんですよ」

「だから、部員の人に聞けつて言つたじゃないか」

「聞きましてよ。でも、教えてくれないんですよ」

「そうか・・・じゃあ、部室行つてみたら良いんじゃないか？」

「部室にいるんですか？」

「今はいないが、今から行こうとしているかもな」

「どういう意味です？」

私はそう聞いたが、先生は『早く行け』と私を教室から追い出した。
た。

「ホント、どういう意味ですか、もう〜」

ドアの前でボソツと言うと、仕方なく探偵部の部室がある、旧校舎に足を向けた。

ギシツ　ギシツ　ミシツ　ミシツ・・・

初めて来た時と変わらない音が響いていた。

「やっとついた・・・」

（古い家とか、苦手なんだよね・・・）

元会議室があった場所が探偵部の部室・・・。

「よしっ」

気合を入れ、ハンドルに手をかけた。その時、ハンドルが勝手に

動いた。

「ひっ！」

私はバツ！とハンドルから手を離すと、その勢いで後ろに倒れた。「いたたた」

「あ、瞳。遅かったジャン」

中から出てきたのは秋だった。私はお尻を摩りながら立ち上がった。

「あたた。秋、なんか嬉しそうだね」

「だって、瞳が部に、入ってくれたんだもん」

そう言っつて私の腕を引っ張りながら、中へ入ると中には、部の人がいた。

「入ってくれたんですね。嬉しいです」

高山さんは嬉しそうに微笑んだ。他の、桜井君や高橋君も嬉しそうな表情をしている。

「ようこそ。純桜学園探偵部へ！」

皆は声を合わせて言った。その瞬間、なんとも言えない嬉しさが、溢れ出した。

「やっと、部に入ってくれたな」

聞き覚えのある声が、後ろから聞こえた。振り向くと、そこには栗原先生が立っていた。

「先生！」

驚く私を気にせず、秋達は先生に話しかけた。

「先生、少し遅かったんじゃないやありません？」

「先生しばらく顔、見せてなかったですけど、どうしたんですか？」

高山さんや桜井君の質問に、丁寧に答えていた。二人に説明が終わると、私のほうを向いて

「ようこそ、純桜学園探偵へ」

と、微笑んだ。

「これから、よろしく」
「よろしくお願いします！」

その後、前回ののように本を棚に並べて活動は終わった。皆疲れている様子だったけど、私は『疲れた〜！』というほど疲れていなかった。

「は〜い、今回もお疲れ様〜。各自、帰っていいよ〜」
疲れきった高橋君の声。先生は、『まだ仕事、あるから』と部屋を出て行った。外は夕方、カラスも人間も家に帰る時間。しかし、サッカー部も野球部も陸上部もまだ帰る様子はなかった。皆より先に、私は学校を出た。

家

「ただいま〜」
返事なし。今日も仕事か……。私は、自分の部屋へ向かった。そして、ベットにうつ伏せの状態で、バフツと倒れた。そして、近くにあったクッションを抱いた。

「やっと、部活ができる！」
「やった〜。皆に『ようこそ、純桜学園探偵部へ！』言われた時の、あの何とも言えない嬉しさが、再び溢れ出した。しばらく、その嬉しさに浸っていた。そして、顧問の先生が栗原先生だという事を思い出した。

「あれは、意外だったなあ〜」
栗原先生だったら、もっと、こう、違う部の顧問の先生をしているイメージだったな。そんな事をしばらく思っていた。ふと見ると、時計の針は七時半をさしていた。お母さん達が帰ってくる時間まで、まだ時間がある。帰ってくるときに、コンビ二で買ったパンを、袋から取り出した。そして、一かじりして、机に向かい、宿題をはじめた。

宿題をはじめてから、三十分後。私は、ベットで本を読んでいた。

宿題を終わらせたわけじゃない。宿題をやりながら部活の事を考えていたら、集中力が切れてしまった。

「部活、これからやっていくのか」。ホントに楽しみだな・・・」
これから、卒業するまで部活をする自分を想像してみる。なんだから、頬が熱くなる。

「でも・・・皆、いつもあの作業してるみたいだったな・・・依頼が無くて、暇だね・・・」

そんな事をふと思った。「まあ、いいや」といい、再び机に向かい宿題をやりはじめた。

依頼の手紙

- 翌日 -

「依頼ないのかな？」

私は、朝食を食べながら、ボソツとそんな事を言った。

『昨夜、Aアパートで殺人が起きました。犯人は・・・』

テレビの中の「30代を保ってます」的な女の人が、話している。
「また事件か」

関心の無い声で、わたしは言った。殺人やら強盗やら飛び降り自殺やら、毎日毎日、放送される。よく、そんなに毎日あるなとニュースを見ながら、寝ぼけた頭で思う。

少しして、私は朝食を食べ終わった。すると、二階から妙にゆっくり降りてくる音がした。

「おはよう」

「おはよ〜、瞳」

降りてきたのは、お父さんだった。お父さんは、どこか寝ぼけた感じで言った。

「今日も眠そうだね・・・」

「そりゃそうだろう。毎日帰ってくるのが遅いのに、行くのが早いんだから。ふあ〜」

お父さんは半分愚痴のように言うと、大きな欠伸をした。それを見ていたら、眠気を抑えていた頭が、ふわあつと緩み、眠気が襲ってきた。テーブルに、頬杖を付くと今にも眠りそうになる。

「早くしなさい」

毎朝、お父さん以上に、お母さんは早起きしてるのに眠くないのかなあ、と思いながら二階へ上がる。

しばらくして、全ての準備が終わると、「行ってきまーす」「行ってらっしゃい」と、いつものように、学校へ向かう。

学校

「おっはよー！」

元気に声を、掛けてくれたのは秋だった。

「おはよう」

私も、それに答えるように言った。

「ねえねえ、昨日の番組見た？」

秋は、バックを机に置くとすぐに私に聞いてきた。

「何の番組？」

「えっと・・・『貴方は何問解けるでシヨ』」

「あれかー。あれは・・・」

宿題が終わり、時計を見ると九時半だった。

「暇になんちやったなー」

そんなことを呟きながら、下へ降りる。テレビのスイッチを入れたら

『はーい。春のスペシャル企画ということで、貴方は何問解けるでシヨ』の時間がやって参りました！』

なんとも、古い始まり方だなあと、思っていると、番組の内容が紹介された。

『貴方は何問解けるでシヨ』は、チーム対抗で行ってもらいます。これから、殺人事件のナゾトキを、チーム全員の力を合わせ、解いて下さい。そして、今回最も点数が多かったチームには、じゃあーん！100万円が贈呈されます。そしてなんと！この番組を見てる方も、今回のナゾトキに参加できます。そして、最後まで謎が解けて、抽選に当たった人には、なんと！同じく100万が送られます！』

観客から、おー！と声があがる。

さらに司会者は紹介を続けたが、余り興味のなかった事なので、冷蔵庫にある飲み物を取りに立った。

『はい。第一の謎です……』

「あれは……」

「難しかったよね」

秋は、眉を下げそう言った。

「そう……だったかな？あんまり、そうは思わなかったど……」

「凄いね、私は1・2問ぐらいしか解けなかったよ」

「そうだったんだ。あれさ、全問で……何問だったっけ？」

「えつとね。20問だったかな？」

「あれの半分は出来た……かな？いやそれ以下かな？」

「えー！でも、そんなに出来るなんて凄いじゃん！やっぱ瞳は凄いなー」

イヤイヤと、私と秋はそんな事を言い合っていた。

時はいつものように過ぎていった。特別な事も起きず、平凡に……

放課後。私が、教室を出て行こうとした時、明るい声私を呼んだ。秋だった。

「瞳、部活行く？」

ああ、忘れてた……

「うん、いいよ」

「今日は、真子も一緒だよ。珍しいでしょ」

「へえー。珍しいんだ……」

「あれ？瞳、驚かない？」

「いや、驚かない？って言われても、あんまり、高島さんの事を知らないし……」

「真子ね！真子の事知らなくても有名と思ってたけど……ふん、そうなんだ……まあいいや。真子のクラス行こう」

「う……うん……」

駆けて行く秋の後ろを、私は着いて行った。

高嶋さんのクラスはまだ終わってなくて、しばらく待つ事にした。
「さよならー」

教室の中から声が響き、ドアが開く。秋はドアから教室を見渡す。
「真子、先生と話してる。あつ、来た。真子」

高嶋さんは、秋の声に気付いたのか、振り向くと優しく微笑み軽くてを振ってくれた。その後しばらく待つと、高山さんは荷物を持ち、ドアの所に来た。

「陸と裕太はちよつと遅れるって。だから、本を移動してくれないかって」

「むふう」

「そんなにふくれる事ないでしょう」

「だってえ。いつもそればかりじゃん」

「んまあ、しょうがないことね・・・」

「むふう」

2人はそんな会話を子ながら歩く。私はその後ろをトコトコ歩く。2人の話からして、多分、ココ最近・・・いや、ずっと昨日みたいの事しかやってないっぽい。

「ねえ、依頼って・・・受けた事ないんですけど・・・?」

恐る恐る聞くと、2人は同時に溜息をついた。

「聞かれるのは迷惑じゃないけど・・・」

「軽く、部活のコンプレックスだよね・・・」

「瞳さんが入ってくれたのは嬉しかったんだけど、依頼が無くちゃ、部活の意味無いのよね」

「それに、依頼探して来ようかって、部長に聞くんだけど・・・」

「面倒だ って言って、協力してくれないのよ・・・」

「あの部活作ったのは自分なのにね・・・」
再び2人は溜息をつく。

「え・・・ああ。済みませんでした。何か、無神経で、ホント・・・」

「良いのよ」

「瞳が入ってくれた事で、何か変わってくれば良いんだけどね」

ギシツ・・・ミシツ・・・

相変わらず、無気味な音がする。にしても、何で、旧校舎なんだろう？

そんな事思っていると、部室の前に、一人の男子が立っていた。目を凝らすと、部長の高橋君ということが分かった。

（高橋君、遅れるって言ってなかったっけ？）

「裕太、何やってるの？」

今にも床が抜けそうな廊下を、秋は軽やかに駆けて行く。私は、冷や冷やししながら、それを見ていた。

「ん？コレ」

高橋君はドアを指す。辿り着いた私達は、『あっ』と声を上げた。

「手紙・・・だよね？」

「う・・・ん」

部室のドアに、『依頼状』と書いてある手紙（？）があった。

「依頼の、手紙かな？」

私がそう言うと、『そうかも！』と嬉しそうに秋は言った。

「珍しい事も起きるな」

「にしても・・・高橋君・・・遅れるんじゃないかな？」

すると、高橋君が私の方を見た。いつもの見透かすような、何を考えてるか分からない目で・・・

「確かにそうだね」

「えっと・・・んー・・・面倒だな」

「ホント、面倒臭がり屋さんだよ、裕太は。面倒がなくて教えてよ」

「栗原先生に『手伝って』って言われて、手伝い終わったから部室に来た。そしたら、コレが張ってあった」

「でも、さつき、城川先生と話し合っただんじやないの？」

「先生とは少しか話してなくて、君達が行って数秒後、僕は教室を出た。そして、履箱の所に来た時に、栗原先生に『手伝って』って言われたんだ。手伝いつてのが、旧校舎の近くで、ホントに時間がかかん無かつたんだよ」

『だから君達より、早いのは不思議じゃないよ』と付け足して言った。

「ふうん、そうなんだ。まあ、部長が早く来るのは悪いことじゃないからね、いいや。早く、その中身見ない？」

「そうだね」

そう言って、高橋君は手紙をドアからとった。

「えっと・・・純桜学園の探偵部の皆様。始めまして・・・」

私達は、純蓮大学じゆんれんたいにある、不思議なことが大好きなサークルです。来月、来桜島らいおうとうという島に行くのですが、島には不気味な数え歌があるのです。更に、15年前・10年前・5年前と5年ごとに、数え歌通りに人が死んでいるのです。計画を却下する訳にも行きませんので、是非、同行してもらえませんか。答えは、来週までに教えてください

「・・・だって」

「依頼・・・って事だよな？」

「そう理解して良いね」

「確か・・・純蓮大学って言ったら、こちら辺にある大学の中では優秀な学校だよな？」

「そんな大学からの依頼か・・・裕君、断る？」

「うん、面倒なのは嫌だ」

私達は一斉に溜息をつく。呆れるにも程がある。すると、ギシッ・ギシッ・・・と階段を上がってくる音がした。

「あっ、皆揃って何やってるの？」

音の正体は、桜井君だった。

「見て見て！依頼の手紙だよ！」

秋は嬉しそうに、手紙を桜井君に見せに行く。

「依頼の手紙だね。と言うことは……初めて、仕事が出来たってわけだ！」

桜井君も嬉しそうに言った。秋はピョンピョン跳ねて、『やったー！』と言っている。すると、手紙から、ヒラヒラと何かが落ちた。

「秋、何か落ちたよ」

「ん？」

秋の足元に落ちたのは、一枚の紙だった。二つ折りにされている。

「何これ？」

「どうしたの？」

高橋君と高山さんが秋の方へ行く。桜井君が紙を開く。

「暗号……？」

紙には、意味不明な言葉の羅列があった。

依頼の手紙（後書き）

絶対意味不明だと思えますので、その所は、済みませんでした！
この先の展開が待ち遠しいと思えますが、待っていてください！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2793d/>

純桜学園探偵部の事件簿 ～桜の数え歌～

2008年8月29日17時50分発行